

とんからりん

サカタ二友の会ニュース

人の繋がらない時代

7月27日 佐世保同級生

殺人事件を知り記す。

本号は、高校時代のクラス会「裸木会」の事を書く予定だった。それはが字数を減らしページ下の「どんつき」欄に移し代えた。原因は、新聞見出しで『人を殺したかった』と報道された佐世保事件。犯人、加害者被害者共に僅か15歳の少女。遺体まで損傷を与えた異様、残酷さに驚いたからだ。

この事件「勉強面などで親の期待に応えたい思いが強かったのではないが。有りのままの自分を表に出せず、母親の死などで抑え込んだものが爆発したのではないか。他人への共感性が乏しい他人とうまく関わられず第三者から見れば些細な原因がきっかけではないか」(毎日新聞)の元家裁調査官のコメント(等々)はあるが詰まる所は「何故」は本人たち以外には判らないだろう。か?。但し、犯罪や事件は「世相」と無関係でなく「時代」が反映するものと思える。

私達の子供の頃、自転車は鍵もつけずに置いてあっても盗難に合わず、「自転車泥棒」が流行したのには戦後だった。(決して同名の伊映画の所為でない)

戦争の現場では、「殺人や強奪」が有っても、戦争中でも国内は「安全で平穩」だった。敗戦後の人間関係も「エエ連続ラジオドラマ」向う三軒両隣り(22-28年)のような「近所付き合い合いがあった。兵隊に行つた人達は「同年兵会」学生生徒は「同窓会」、労働者は「団結せよ」とばかりに「労働組合」をつつた。そして日本は経済大国で物資も豊か、教育の環境も、情報も多種多様に、平和を謳歌した。

たのは戦後だった。(決して同名の伊映画の所為でない)

戦争の現場では、「殺人や強奪」

が有っても、戦争中でも国内は「安全で平穩」だった。敗戦後の人間関係も「エエ連続ラジオドラマ」向う三軒両隣り(22-28年)のような「近所付き合い合いがあった。兵隊に行つた人達は「同年兵会」学生生徒は「同窓会」、労働者は「団結せよ」とばかりに「労働組合」をつつた。そして日本は経済大国で物資も豊か、教育の環境も、情報も多種多様に、平和を謳歌した。

だが待てよ!。チョとこの頃の人間関係が、いや日本も「変」になつたと思えてならない。他人のことは「知らないふり」見て見なけり振りが横行し、「自己中」だらけになつてきたよつだ。

祖母は「人」といつ字は、支えあつて出来ている。先ず「他」人様を大事にしなはれ!「信用は、されるそのお人を認め信じる事で相手さんからも信じられる」と。言い続けて大往生をした。

今は「個人」が最優先。世界も全体の平和より「自国力」が優先としか見えない

「LIVE」を30年近く経営し、多くのお客様とお会いし見て来た

発行者
株式会社サカタニ
集西楽・サカタ
ファミリーマート
サカタニ京阪七条店
〒605-0993 京 東山区七条こころ坂下
・075-561-7974
URL www.sosake.jp/
Eメール info@sosake.jp
とんからりんは
毎月発行の
会員新聞です

開催日:7月20日(定例第3日曜日朝9時~)
第114回 朝粥食べて・おシャベリ会
報告者:高木英智様



朝粥食べておシャベリ会... 恒例・食前のお話... お題:「奇跡の昆布革命」

満員・楽々ホールでスタート『フォークソング「神田川」』作詞の喜多條忠さんはお兄さんとおつしやる喜多條清光さんは株式会社大滝大阪昆布の社長さん。天神祭でご多用の中、京都へ。昆布は大阪で加工、小売が盛んだが、産地ではない。なぜ大阪なのか。交易で、北前船が北海道から直接大阪へ届くようになったのが理由とか。味覚は、おいしい、おいしくないも大切だが、この食べ物安全かどうかが、それを見極めることがいちばん大切とのこと。五味とは、甘味、塩味、酸味、苦味、そして、旨味。日本人は旨味の存在を訴えてきたが、世界からは否定の歴史。2009年に、旨味が第5の



海中昆布の長さ説明

味覚として認められた。今や健康、グルメ志向であり、昆布はびつたりの食材だが、現実には、生産高が全盛期の5分の1以下。特にダシ昆布の需要が低落。理由は、ダシの取り方がむずかしい。和食を家で作らない。ダシを取ったあと、昆布を捨てるのがもったいない。

が、この間に恐ろしい程の変化が見られる。子供さんが悪戯をし、ても、叱る「親御さん」が少なくなつた。

先ず「各家庭」「日本」「地球」の順に滅亡するだろう。人が「人間」あつて「人間社会」は出来ている。人類は繋がらないと生きられと思つ。この「とんからりん」もそう思いながら書き続けてきた。

品。年。の。校。には。真。ず。名。日。を。作。3。す。力。高。に。時。写。り。せ。を。毎。画。ら。表。オ。シ。高。時。当。と。入。り。て。映。た。る。か。代。リ。シ。生。部。に。も。活。し。に。いた。え。か。代。リ。シ。生。部。に。も。活。し。に。いた。数。戦。を。ト。品。年。た。画。強。部。に。様。に。本。は。画。映。ウ。イ。テ。作。一。見。映。部。勉。目。の。見。指。泥。り。監。の。棒。ア。ウ。一。は。画。映。ウ。イ。テ。作。一。見。映。部。勉。目。の。見。十。車。タ。監。画。自。転。車。泥。棒。の。映。画。後。の。映。画。

健康、グルメ志向であり、昆布はびつたりの食材だが、現実には、生産高が全盛期の5分の1以下。特にダシ昆布の需要が低落。理由は、ダシの取り方がむずかしい。和食を家で作らない。ダシを取ったあと、昆布を捨てるのがもったいない。

昆布屋さんの意識改革を行ない、「大きな昆布が値打ち」を、「最初から細かく刻んであるのが値打ち」へ。お湯でダシを取るの面倒で、日持ちもしないが、水からとったダシは保存可能。この「昆布水」で作る料理が絶品。レシピにある「水」を「昆布水」に置き換えるだけで、プロの味に。ユーモア満載で常に笑い声が響き、昆布の効用をお聴かせいただけました。そして、産物には歴史的な背景とつながっていることも学ばせていただきました。

卒業後毎年「会」の集まり続けられた来た。67年前の卒業時クラス60名だったが、今年には24名案内し13名が出席した。高三になつて直ぐ、3〜7名奇数でグループをつくりキャップを決めよと先生の指示で創つた。以後行動はその単位で動いた。先生の指示は「キャップを通り、奇数で結論が少キリ出る。共同行動、共同責任、グループ内の融和と繋がりが強くなった。今も毎年「裸木会」が途切れずの開催は「坊さん」のお陰だ。高三の時、悩みの相談し、先生の判断に方向に進んだ。人生の別れかれ道だつたのだ。結果で私の今があると思つ。

生ある限り出席をしよう!

どんつき 近頃は学校を卒業しても「同窓会」をやらないよつだ。小さなゼミや友人単位の集まりは有るよつだ。

ヨシちゃんのこと



紀元(皇紀)

二千六百年

今年(西暦2014年)は西暦2014年。戦前日本で使用されていた「皇紀」では「二千六百七十二年」になる。私の貞教尋常小学校入学は昭和15年(西暦1940年)の時、大日本帝國では西暦は厳禁、神武天皇が橿原の宮(奈良県)で即位された年を「皇紀元年」とし入学は「皇紀2600年」だった。その数年前から切の良い「皇紀2600年」を用い国民挙げて多くの祝賀行事、記念を表す「建築建造物」等々が出来た。

その一つが「京都(霊山)護国神社」。1853年(慶応4)維新の志士の靈魂を合祀で「霊山招魂舎」創建(域内の坂本龍馬等墓地も有)。



1939年(昭14)神域を隣地に広め、京都出身の戦没者等をお祀りする場所に大改造した。その工事の勤勞奉仕に祖父は私を連れて参加した。「何が出来るのや」と聞くと「戦死した兵隊さん達を祀る御宮さんや」と言った。

既に日中戦争(支那事变)の最中、蒋介石(国民党)の

首都「南京は陥落」。その祝福で市電は花電車を走らせた。「2600年の歌」も出来て全国各地で祝賀行事が催された。

「町内会・隣組」が出来て、各町内に「国旗掲揚所」設置された。(現存も有り?)共産党員や反戦傾向の人は逮捕、情報が洩れるのを防ぐ「貴方の隣にスパイが居る」とかいたポスターが貼られていた。祖父が夕飯時「貞教学区さん(鉄板販売業?)のお嬢さんが「アカ」で捕まった」と話していた。註・逮捕のことは書籍にも記載されているが、さんの氏名は今一つても知らない。

そんな中で紀元二千六百年。既に決まっていた「東京五輪」は中止され、昭和16年12月8日に大東亜戦争開戦。臨時ニュースを聞いた時、祖父は「遂にヤッタゾ」と大喜びをしていた。翌年父も陸軍兵に。戦況は厳しく私が疎開後、昭20年5月、勤勞奉仕で九州の炭鉱で鉱夫の仕事に従事、7月に胸を患って戻って来た。今考えると「塵肺症」だったろう。終戦の15日、偶々疎開地から一時帰宅中の私は「終戦の詔」をラジオ放送で聞き、病床の祖父に伝えた。



終戦の詔勅

祖父は目から大粒の涙を流し、「天皇陛下様が私達が至らなかつた。申訳ございませんと」正座し東を向き最敬礼をした。そしてその9月1日58歳で亡くなった。その後、過ちは二度としない「戦争放棄・平和民主主義」の「日本国憲法」が制定され、今日に至った。前の戦争以後、自国の戦で死人、他国の人も

戦争で殺さず69年経過した。天災も人災も忘れた頃にくる。頃の日本に「皇紀二千六百年」時代のよ様な空気を感ずる。写真は「第二次世界大戦直前のベルリン五輪」次の東京五輪をこれに似た姿にさせまいぞ。ハイル・ヒツラーは東京五輪に不要だ。アヘいなぁ!



日本人力

石動敬子

旅から帰り、見上げた賀茂川の空には赤トンボ(夏茜)が沢山飛び交っていました。えっ、秋のものももつ? んまあ、そうですね。先取りも、後戻りもあり、



秋の季語、台風が7月に来て大暴れました。わが散策圏にある植物園の草花にも、早い遅いがありました。ことに待ち遠しかったのが、ねじ花(文字摺り草)と山ユリの花でした。みちのくのしのぶもぢぢり

誰故に乱れ染めにし われならなくに 私の心が乱れているのは、あなた

のせいよ、というわけです。山ユリは、私の生まれ故郷の花。帰る度にあぶくま急行丸森駅の自

この旅に出る少し前にやっと咲き出した植物園のねじ花でしたが、あつといつ間に刈られて仕舞い、半泣きで案内所に抗議も、でも旅の終わりの丸森町の郷土館にも咲いていました。大喜びの私に苦笑される館長さんでした。「これか

らも毎年、この花が咲く頃来ますから」と約束してきました。そうでなくとも、蛸や河鹿(かじか)郭公も啼き、青田の美しいこの季節。山野草のこの花は、絶滅どころか、結構、根強く、頼もしく、わが分身かも、と、扱われ、すねているようにも真つ直く伸びてゆく一途な花です。山形の山寺も、松島も、北上川のむこうの津波の被災地も何度か行った土地。でも「百聞は一見に如かず」ですね。千年に一度といわれるこの度の震災。被災地への観光も大事な支援、行って初めて分かることがあります。例えば、原発で知られる女川町、ブックレット、中国人実習生の「なぜ162人全員が助かったか」(日中友好協会宮城県連泉支部)をやつと読め気分になったのです。感動的でした。人口約二万人の割弱が犠牲になった町で、中国からの若い労働者たちを、自分は犠牲になつても守つた、そんな方たちがその町にいたのでした。「日本人力」といつか、なかなかすごい人達が昔にはおられます。なのに、政治の表舞台、国と国の外交もどうしてあなののか、恥ずかしいような昨今です。そつか!選ばれるべき人が選ばれてないんだ、そつ思いました。

平成19年・選挙人選作より、選挙権使つて築こう未来の日本 若狭町 森川 紀子さん

京都&東山 ぶらりピカリ

52

東山区

問屋通

とみやまごおり



問屋通は鴨川東岸道路の一つ東の通り、五条から正面通り間で極短い通りです。昭和20年1月16日深夜、近くの「馬町」が29に空爆され、その直後、迅速に五条通南側の「建物強制疎開」が進行、五条付近の問屋町の家や店が多く取り壊されました。が、今も問屋町は、低いビルが少しあるが、古い和風の建物が軒を連ねています。祇園町のような派手でないが明治大正の「京」が見られる通りです。ページの建物の絵は、(京都府HPから転載)江戸時代からある豪商柏屋(紙問屋)。現在、本拠地は東京都だそうですが、京都の屋敷はそのままだを残り「洛東遺蹟方館」(入場料あり)として同家保有の美術品などが展示されています。また、その北に京の駄で有名な「半兵衛駄」



さんと純日本式旅館「晴鴨樓(せいとうろう)」さんがあります。晴鴨樓は、戦後の映画全盛期に映画俳優さん

ん等が常宿の様にされていたようです。野球小僧、でお馴染みの歌手友田藤彦さんが、(古いなぁ)私の卒業した貞教小学校の校庭を借り、ご自分の野球チームの練習で使っていたことを覚えていますが、この通りの今は静かな所ですが、古くは京の「中央市場」が有ったのです。その名残は「半兵衛駄」さんの直前に市場の神様「市比賣神社分社」が有ります。豊臣秀吉の五条大橋、大仏殿、本町通開通等、馬町経由の古道渋谷街道で山科と近い立地から、文禄年間(1592-99)青果商山中氏が中心に「市場」を開いたと伝わっています。今の五条通は(戦時中疎開)幅広いですが、私の子供時代は市比賣神社から五条までは、市場の名残でしょうか石畳敷き詰めた道でした。その右に「溝」状の窪みが有り、祖父に問うと、「長く市場だったから荷車の轍(わだち)で削られたんやろ」と(国民学校三年生の頃)教えて呉れました。



そんな昔を覚えているのに、近頃は、今聞いた電話番や、さつき迄使ってたハサミを置いた場所を忘れず。気楽になれそうだし、「とんからりん」を書くことも忘れようか。

市電が走った 京都を巡る

42

福田静二



丸太町通を西へ進みます。南は平安神宮の神苑、北側は錦林小学校などが続き、平安神宮の大樹が丸太町通にまで伸びています。平安神宮が途切れると、西側には民家や商店が並ぶようになります。そんな中に、北側にハンディクラフトセンターがあります。おもに外国人向けに日本の伝統工芸品を販売する免税店です。当時では珍しい外国人向けの店舗で、いつ通っても外国人を乗せたバスが停車しており、ちよつと異国な雰囲気を感じていました。



熊野神社を右に見て丸太町通を行く市電

両側に商店が増えてくると、まもなく熊野神社前の交差点に到着です。市電は東山線と交差します。丸太町線からは南へ曲がるポイントがあり、錦林車庫前から祇園経由で四条線へ入る20系統もありました。道路地図には「東山丸太町」とも記される交差点ですが、やはり「熊野の交差点」でないといふと来ません。その由来は、もちろん交差点北西に鎮座する熊野神社に由来します。



熊野神社前交差点を出發する丸太町線の市電

社伝によれば、弘仁二年(八一)紀州の熊野大神を勧請したことに始まります。熊野三山の別当職を兼ねる聖護院が近くにあることから、その守護神として建てられたと言われています。応仁の乱により社殿は焼失しますが、再建されて江戸時代に整備されました。当時は鴨川までの広い神域でしたが、市街地化や、市電の敷設工事などのため狭められ、現在のような交差点に面する小さな神社となりました。熊野三山の神の使いとされるヤタガラスは、日本サッカー協会のシンボルマークになっています。そのこともあって、今では熊野神社にもサッカーのお守りがあるそうです。

もうひとつ、熊野神社前と言えば、京都を代表する和菓子、八ッ橋が名物で、交差点周辺にはいくつかの店があります。箏曲の開祖といわれる八橋検校が亡くなって黒谷の金戒光明寺に葬られます。

さて、この京都市電の連載を始めてから、お蔭さまで四二回を重ねることとなりました。ひとつの区切りとして、8月にサカタニさんの二階ギャラリーカフェで「京都七条市電通り」というタイトルの京都市電の写真展(案内同封)を行います。お見苦しい写真ですが、会場で皆さまとお会いできることを楽しみにしています。

酒屋で生きて 生かされて



第九十三話

酒と税金

次郎長…忠次大笑い

室町時代 文安(1464)頃から酒と税金は密接な関係であったといふ。鎌倉時代、京都は酒屋が隆盛をきわめたが、当時はまだ麴造りは酒屋の職業範囲ではなく、麴の製造から販売までをつかさどる麴屋が別個にあり、麴屋は北野天満宮の神人(じにん=奉仕役)身分を得て麴座と呼ばれる同業者組合(座)を結成、北野社の権威を背景に京都西部の麴の製造販売の独占権を有していた。そして室町幕府も本来、土倉(質屋金貸=銀行)から土倉役、酒屋から酒屋役を徴収し、同時に庇護もしていた。そのことから庶民が結集して起した「土一揆」では「酒屋・土倉」が襲われたのだろう。旧大蔵省と銀行酒造会社の関係の原型か。

私も父の経営していた酒問屋「酒谷本店」経営危機時から(昭29)酒卸業に携わることにになり、「関税」監督官庁、大蔵省(税務署)と酒業界の微妙な関係を知った。



北野天満宮本殿 特にな「問税」は当時の自

衛隊予算を越える程？ 税収で大蔵省の中でも花形的な「局」だった。酒造り、酒卸小売も大蔵省からの免許が要る。酒の出入数の記帳義務があり、酒卸は税務署だけでなく「大坂国税局」調査も有り、局か三名程でこれら、「机から離れ、ポケット内の物を全て机に出せ」と命じられ調査が始まる。時々TV放映される「税務査察官」と同じ形だ。その頃はマダ酒の醸造石数が制限され、普通の酒と前

号記載の「理研酒」を混ぜて売らないと酒小売店も「お客さんの要望に応じられない」という噂話まであった。これは敗戦後昭和32年頃までの話です。国税の中の問税比率が高く、酒蔵も丁重に役所も

気を使う良い形にだったのだ。局長クラス官僚で代議士や大臣になった人。逆に、政治の良い味を知った酒蔵さんが代議士、大臣(総理お二人)におなりのケースも少ない。今はどうか知らないが問税は「骨牌税」も有り。酒煙草麻雀牌も増えそうにないこの頃、ヨッシャー！「カジノがある」と知恵者が動いた。博徒大親分・次郎長もこれに負けそう。

陽月(ようつき)



月三 天

昔、陽(よう)という者があつた。この者はよく動き、よく笑い、よく話した。この者の周りに人は人が絶えず、周りの者もよく笑つた。

同時期に、月(つき)という者があつた。この者は物静かで、知識があり、特に自分からは話さないが人に優しく、周りの者はよく頼つた。二人は同じ町に暮らし、たまに行き来をする仲だ。そんな二人の、短い会話をどうぞ。

「なあ月よ、俺は人の笑顔が好きだ、だから笑わせることばかり考えている。」
月の家は、山の近くにある。家が奇麗に見える場所だ。家

の中は壁が本に埋め尽くされていて、町の者達が、たまに図書館として利用するほどだ。月は部屋のある四人掛のテーブルで、本を読んでいる。陽は、部屋の中の本を上げしげと見回しながら、月に話しかける。

陽は、唯一本が無い天上を見上げた。天上には幾つもの小さな天窓が開いていて、晴れの日の、この部屋の光源にもなっている。そこから見える風景は、絵が動いているかのようだ。鳥が飛んでいったり、白い雲が流れたり、空の青がぼっかり数か所開いていて、時が経つと青の部分がかわつてゆく。

返事はしつかりしているが、月の目は文字を追っている。「でもよお、月、俺はたまに疲れるんだ。だからこうしてお前の所に来る。」

「見てみようと思つんだ」「何をですか?」
落ち着いた月の声が興味深げになった。

「さあ、何を見に行くんだらうな? 蓋を開けたら、遠くからこを見ているだけだ。つという話なのかもしれない。」

「ありがちなですね。でも」
月は言葉を切った、続きを言うべきは自分じゃない事を分かっているからだ。
「知れるんだよなあ、この場所以外を。だから、行くか」
月は本を静かに閉じた。

編集後記

この「とんからりん」作成はビル二階南側に窓のある部屋。空調はなく、蒸し風呂「状態」。濡れたタオルを首に、上半身裸。常から、寒さには強く暑さには弱い私を知る身内は熱中症「になる」と、8月は「休刊」にしたと忠告します。

が、1989年から発行。月刊に179号「病氣」以外で発行を休まずの意地も有つて、暑さに負けるもんかと頑張りて見ました。幼児の頃から「片意地で変コツで融通の効かない子」と38年前亡くなった祖母に言われ続けられて来ました。

三つ子の魂百までと言つのであと20年の418号までとなります。そうなればキネスブックか?。でも読んでくださる方がいなければ「不要な」ミを増やすだけ。今までも「読んだ工のお声」が力になって続けられました。もう直ぐ地獄の蓋も開くお盆。先に地獄か極楽行つた、アイツあの子、あの方と読んでくれていた方々の顔を思い出して、ヤッパリ書き続けようかな。

消しゴムハンコ教室

月三 天
毎週火曜日: 3時~5時 場所: 水曜 4~6時: ギャラリー集

月4回・1時間

月4千円

2時間コース: 月7千円

材料料費 850円

